

# 人間と真実の生き方

五井昌久

## 人間は本来神の分霊であって業生ではない

これから私共の教義である、人間と真実の生き方について解説してゆきたいと思えます。先ず最初の、人間は本来神の分霊わけたまであって、業生ごうじやうではなく、常に守護霊、守護神によって守られているものである、ということから説いてまいりましょう。

人間はいつたい、神の子なのか業生なのか、という問題は、古来から宗教者の論点となつているところなのです。これを、性善説せいぜんせつ、性悪説せいあくせつともいっております。人間はいつたい神の子であつてその性は善なのであるうか、それともまた、業かじの子であつて、その性は悪なのであるうか、という両者の考え方は、いずれも一理ありまして、こちらが正しい考えなのだ、といい切りますと、必ず反論がかえつてきまして、その説明

しかできない人間が、何で神の子であつたり、善なる存在者でありましょう。

と反論してくるのです。成る程その通りなところが充分にあるのです。こういうわれますと、この反論者に満足のいくような答えはなかなかできません。現在の人間は、神の子としては、あまりに低次元な精神生活しかしておりません。先ず自分を守る、ということが本能的に行われてしまします。そしてその自分を守るといことが、この相対的な世界ではどうしても相手の損とか不利益ということに関連しがちです。

夫婦の間、親子の間、兄弟姉妹の間においてすら、そういう自己本位の生き方が行われていて、相手を傷つけやすいのですから、まして、他人との間、特に遠い他国の人との利害関係などは、相手の損害などほとんど気にかからぬのが一般人の想いのようです。

自国を守る為には、他国人の死などは問題ではありません。戦争などはそういう心理から生まれてくるので、人間の性は善なり、という根本思想が崩れかねません。台風襲来の場合などでも、日本本土へくるか他国の方にゆかかなどということころへきますと、どうぞ日本本土が襲われませんようにと、自然に想われます。そして他国の方についてしまうと、あ

でき得ない個所をつかれます。

人間は神の子であつて、性は善なるものである、ということ唱えますと、人間が神の子であつて、性が善なるものであるなら、何故こんな欲望に充ちた、争いに充ちた悪いことが多い世の中ができてきているのだ、といつてきます。神はオールマイター（万能）であつて何でもできないことはない筈である、そうした万能なる完全な力をもつた神の子である人間が、自分の生活を守る為に他人を損ねたり、自国を守るために他国の損害をかえりみなかったり、常に自分や自分の周囲の者の利益の為には、他の損害を顧みるいとまのないような生き方をしている。それはたまには、自分を犠牲にして他を救うような立派な人もいるけれど、それはほんの稀な存在であつて、一般の人々は先ず自分自身を守ることに汲々きふきふとしている、というのが現実の姿ではありませんか、そんな生き方

よかつた、これで助かつた、というように、他国の損害のことの方には想いがゆかず、我が身の安穩を感謝する気持だけが強くでてまいります。

こういう気持が自然にでてくるところなどは、完全円満である神から生まれた神の子の生命の同一感からは裏はに外れている、というより仕方がありません。

こういう風に神の子説、性善説の欠点のようなところを反論されますと、余程徹底した思想の持主でないと、それもさうだな、神の子説、性善説は理想論かなあ、と思つたりしてしまします。

ところが今度は性悪説について、神の子論者から反論すれば、どんな人にも良心というものがある、悪いこと、人間の道に外れたようなことをすれば、誰でも良心が痛むものである。狂人か、極悪非道者以外は誰でも良心の痛みはあるのだ、人間はすべて、悪を嫌きらひ、善を求めている、悪行為には眉をひそめ、善行為には感謝感激する。これが人間の本質である。だから人間の性は善である、というのだ、というのであります。

実際この世において、悪を讚美する人は変質者以外にはないと思えます。とすると、人間の性は本来善である、ということができるわけですが、これがまた、そう簡単にいい切れ

ぬ程人間は複雑にできております。

一般の人々というものは、自分や自分の周囲の者と何等かわりのない善意とか、利害関係には、無関心か或いは善意の方に味方を致しますが、いざその渦中に自分が入ってしまいますと、自己の立っている側を善なり、と思いかもうとします。そしてひたすら自分側の立場の有利になるために、相手の損得を考えようとせず行為するわけです。これは特別秀れた人格者でない限りは、その差はありますが、大同小異のところですか。

と致しますと、こういう行為が自然とでてくる人間というもの、果して簡単に善なりといい切れるものではありません。まして、神の子なり、と大きく見得を切るわけにもゆきません。

私共の説いておりますところは、性善説の側であることは明らかであります。が、只単に人間は神の子だ、実相完全円満だ、悪は無い、不幸は無い、などというではありません。人間は神の子であり、性本来善であることは、私の霊体験、霊覚によって、はっきり判っているところなのですが、この現象世界の様相は善悪混淆でありまして、悪や不幸の方がよきわ立ってみえております。その最もなるものが、戦争状態であり、国と国とのいがみ合いであります。個人集団の小

守護霊、守護神とのつながりを無視して、人間神の子としても、人間の性は善なり、といっても、それは極めて微弱なる善意であって、少しく業想念の波動がかかってくれば、すぐにもぐらついてしまう程のものなのです。

宇宙神としての神は、絶対者であり、一なるものであります。この一なる大生命が、この地球界に、肉体的人間として生活してゆくためには、一なる大生命としては、到底生活してゆくわけにはゆきません。種々様々な変化を経て、分生命として、この地球界に、一人一人の人間として生まれてゆくわけなのです。

これはどういう変化をしているかと申しますと大まかに説明しますと、拙著『神と人間』にも書いてありますように、一なる宇宙神は一が二に二が四にというように、その働きを分けまして、天地創造を成し遂げ、人類世界を創ったのであります。が、人類の最初の出発点と致しまして、そこに直霊という光明源、生命源を七つに分けて存在せしめたのであります。この七つの直霊が、あらゆる人類（あらゆる人類とは、地球ばかりではなく、宇宙あらゆる星々に住む人類という意味であります）の世界をつくる根本の力となっているわけがあります。

この七つの直霊が、それぞれ横縦に働きを分けまして、横

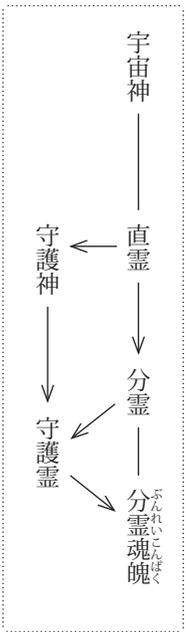
なる悪行為は数限りなくあるようです。そして、より強い悪の方が勝利を納めているようなところもあります。

そこで私は、人間は神の分霊であり、神の子であるけれども、分霊としての自分一個人、肉体人間一人の存在として生きていく限りは、この世において、神の子の姿を、はっきり現わすことはできない。少しくらいの善意は、この世界の烈しい業想念の波の中では、すぐに蔽われてしまう、といって人間は業生ではない。業生ではないといっても、真実の生き方を知らないでは、業の子と同じように、悪行為をしないではこの世では生きてゆかれないようなことになってしまふ、というのであります。

**守護霊守護神に守られているものである**

そこで、真実の人間は、肉体の自分個人が、自分そのものではなく、祖先の悟った霊魂、つまり、霊魂としての親である守護霊と、霊としての親である、いいかえれば、守護霊の親、肉体人間の分霊魂にとつては、祖父母にあたる守護神との、完全なるつながりによって、はじめて、神の子人間の真実の姿を、この世において現わし得るものである、と説いているのであります。

には各守護神となり、縦には、ずうっと肉体界まで降って肉体人間となり、その間には各守護霊が存在しているのであります。



となつて、一人の人間が出来上がっているのであります。これは只簡単に説明しただけで、事実はもっともつと複雑なるものなのですが、あまりくわしく説明しますと、かえつてそうした神秘的なことばかりに気を取られて、本命である日常生活において解脱してゆく行為がおろそかになりますのでやめておきます。

宗教的には、神は唯一神であるとか、多神であるとか、意見が二つに分れている向きもありますが、神は唯一神であつて、多神でもあるわけで、人間は唯一神から生れた多神の末であるわけです。

そこで次は、どうして神の末である人間が善悪混淆の人間に成り下がってしまったのでしょうか、そういう説明から、

教義の解説をしてみよう。

### 過去世からの誤てる想念とは

私が宗教の道に足を踏み入れてみて、一番強く感じたことは、多くの人々が神に救いを求めながら、実際に安心立命している人、神の子としての真実の姿を出しきっている人が何人あるだろうか、ということでした。大方が自分の想いを、ごまかして、救われていると思おうとしたり、神の子だ、神の子だ、と自分に言いよかせては、その時々を過しているのですが、その人々の行為は神の子の姿を現わしきっているとはいえないのです。まして、神も仏も無い人たちにとっては、救いとか救われとかは問題でなく、その場、その時々々の自我欲望の満足感に、その一生をかけているわけなのであります。

こうした地球界における人類に、神の子の姿が真実に現われきるのには、一体どうしたらよいのであろうか、私は随分と考えつづけ、私の生命を捧げますから、どうぞこの問題を解決させて下さい、と祈ったものでした。

天国に至る門は狭く、滅びに至る道は広し、と聖書にもありますように、真実の救われの道、神の子の姿を現わしきる何故かと申しますと、分霊魂魄の人間だけでは、烈しく渦巻いている業想念波動の壁を突き破って、高次元の微妙な波動の世界の自由性を現わすことはできないからなのです。神の子の本質は、その本住の地である、高次元波動の世界（神の国）から、絶え間ない、光明波動を流入して貰っていないければ、現わし得ないのです。

### いかなる苦悩といえども現われれば必ず消えるもの

そこで、人間は凡夫なのだから、阿弥陀仏あみだぶつのみ心の中に入りきって、阿弥陀仏のみ心の中から改めて真実の人間の生き方を頂き直すという唱名念仏の教えが生まれただのであり、肉体人間では何事も為し得ない、イエスのみ名を通して神につながるのだ、というキリスト教の教えがあるのであります。

私の教えは、阿弥陀仏、イエスというところを、人間一人一人に関係深い、祖先の悟った霊であり、自己の魂の親でもある守護霊そして直霊の救済面の現われである守護神という、何教の人にも誰にも納得できる形で、人間が神の子の真実の姿を現わす道を説いているのです。

守護霊、守護神というのは、前から申しておりますように、

道は、なかなか厳しく狭いのです。それはどうしてかといいますが、この地球界は物質世界でありまして、粗い波動の世界、低い次元の世界であります。ところが、霊なる人間、直霊から分れた分霊としての人間は、光明波動そのものでありまして、微妙な波動の自由自在に活動し得る存在者なのです。この微妙な波動をもった高次元の存在者が、低次元の物質波動を身に纏まとって生活しなければならぬのですから、その不自由さはおして知るべしです。

この不自由さの中で、霊なる人間は、次第に物質波動になれていってしまい、自己の本質から離れていってしまったのです。いわば、肉体波動、物質波動に同化していつて、微妙な霊波動、自由自在なる心が、いつの間にか、低次元の波動に蔽おほわれていったのであります。このギャップ（すき間へだたり）が業波動となって、今日までの人類世界を善悪ぜんあく混淆こんごうの世界としているわけなのです。

人間の過去世から今日に至るまでの誤てる想念、と教義にありますのは、このことでありまして、この業想念波動ごうぜんねいぼどうを超えて、真実の神の子人間をこの世においてもあの世においても現わし得るのは、先程から申しておりますように、真実の人間の在り方である、守護の神霊との完全なる一体化がなされなければ、到底駄目なのであります。

自分自身の本質的な存在なのですから、切っても切れない仲なのでありますから、こちらがその方に少しでも想いを向ければ、向うからは光の波動を流しやすくなるのです。それを常に守護霊、守護神への感謝をしつづけているような態度で生活していれば、これはなおさらに守りやすくなり、神の子の姿を早く現わし得るようになるのです。

守護の神霊との一体化の姿が真実の人間の姿なのですから、そういう心でいさえすれば神の子の姿が現われないではおかないものなのです。しかし、過去世かこせから現在に至る迄の、業想念波動の中に把つかわれていた想念行為の消えてゆく姿としての、苦悩や不幸災難、嫌な想念波動もあるのですけれど、これはすべて、人間の真実の姿が現われる為の消えてゆく姿であって、必ず消え去ってゆくものなのです。

この消えてゆく姿という教えに徹しませんと、人間神の子光明燦然とか、悪も不幸も病気もないとかいう真実の教えも、兎角うまごごまかしになってしまつて、かえって自分の本心を蔽おほいかくしてしまつて、自己隠蔽じごいんぺいの形になってしまいがちなのです。このところは同じ光明思想でもとても大事な相違でありまして、自然に成る程成る程と肯定できて、自分の想いをごまかさずに、みんな消えてゆく姿なのだあと、力みなく気張りなく、世界平和の祈りの中に入ってゆけるし、守護の神霊

への感謝もできてくるわけなのです。

人間神の子といっても、この身そのまま極楽浄土といっても、現象世界にはやはり、悪や不幸災難が充ちておりますし、自分の想いの中にも自分でも嫌いだなあ、と思えるような愛の不足したような想念もあるのですから、ここは素直に消えてゆく姿という言葉に徹してしまつて、すべてを守護の神霊の集合団体である救世の大光明の中に入れて、世界人類の平和を念願する、世界平和の祈りのような人類愛の祈りの日常生活をつづけてゆくことがよいと思うのです。

そう致しますと、業波動である悪をそのまま肯定している性悪説も、世界平和の祈りの中に消えていつてしまつて、自分を責め裁く想いも、人を責め裁く想いも次第に無くなつてしまつたのです。

### 善は善、悪は悪とそのまま素直にみる

人間は神の分霊であり、神の子なのですから、必ず救われるに定まつているのです。ただ今日までのように、業想念波動の現われである悪や不幸につかまつていて、世の中は悪い、不幸な世界だ、というように想いつづけていたり、消えてゆく姿という順序を踏まなければ、神の子人間は現われないの

に、ただやたらに、神の子完全円満と思おうとして、事実

はなかなかそうならないので、ついには自己や他人の不完全さに打ちひしがれたり、自他の現象をごまかしの眼でみて、あたかも自分は神の世界にそのまま住んでいるのだ、という印象を人に与えようとするような、偽善者、不正直な人になつてしまつていては、人間の真(神)性は現われてはまいりません。

人間はこの現象世界は、そのまま素直にありのまま、善は善、悪は悪とみ、不幸は不幸とみてよいのです。悪を悪とみまいとし、不幸を不幸とみまいとし、不調和を不調和とみまいとするような光明思想は、人間の自然な想いをねじ曲げるようなもので、真実の光明思想というわけにはゆきません。無理なく自然に想念が光明化し、神の子の姿を現わし得るようになるのであれば、世界人類が救われるものとはなりません。

人間本来神の分霊であることは間違いないことなのですから、みたまま、味わたつたまま、現われてくるものすべてを消えてゆく姿として、神様のみ心の中に送りこんでしまえばよいのです。実際にすべては消えてゆく姿に違いないのですから。

諸行無常、すべてが変化変滅してゆくのがこの世の自然の

姿です。ただ常住なるものは何か、といいますと、神のみ心そのものだけなのです。ですから人間は、すべては消えてゆく姿として、神のみ心の中に、すべての想念行為、現象を入れきつてしまえばよいわけなのです。

消えてゆく姿という想念で神のみ心に入りきつてしまうエレーターとして、世界平和の祈りという、神のみ心そのものである人類の大調和世界顕現を願う祈り言を、日常生活の一瞬一瞬の間においても実行しているのであります。

こういう日常生活というものは、すべての現象を無理に善なりと思おうとするわけではなく、自然と悪や不幸や、自他の想念の誤ちに把われなくなつてしまひ、いつの間にか、真実の光明思想の生活になつてしまうのです。肉体人間、物質人間観が、自然と神霊人間観になつてしまう易行道の光明思想が、消えてゆく姿で世界平和の祈りなのであります。

### どんな困難の中にあつても

#### 自分を救し人を救す

ここで教義の中の、自分を救し、人を救しということについて少しお話し致しましょう。

人を救し、ということとは誰でも申しますが、自分を救し、

ということとはあまり申しません。宗教の世界では、かえつて自分を責め、たしなめることを善しと思つております。私が自分を救し、ということを経験と致しましたのは、人間は完全円満なる神の子である、という根本を知つておりますので、神の子である自分を責め裁くというのは、他を責め裁くと等しく、神を責め裁くことになります。肉体にまつわる想念で、どうして神の生命そのものである自分や他人を責め裁くことができましようか、自分を責め裁く想いの中には、他をも責め裁く想いが潜んでおります。

この責め裁く想いが、この世にある限りは、この世に完全平和はおとずれません。それでは、自己の悪も誤ちも、他人の悪や誤ちもそのままにして置けと置くのか、という疑問がでてくると思います。

私はそのままにして置けとはいっていないのです。責め裁くかわりに、消えてゆく姿という想いで、すべての悪や誤ちを、世界平和の祈りに託して、神のみ心の中に入れてしまおうとするのです。

人間には神の生命を責め裁くことはできませんが、神は絶対者ですから、どうなさろうと御勝手です。ところが神は愛そのものであり、大調和そのものですから、神のみ心の中に入れてきた業想念である悪や誤ちは、神の大光明波動の中で、

見事に消え去ってしまうのであります。

### 徹頭徹尾消えてゆく姿で世界平和の祈り

そして、そうした業想念を運び入れた人々の祈りの道を通して、かえって神の大光明の波動が、その人々の中に入ってきて、その人々が光り輝いてくるのです。煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいという仏教の教えがそのまま生きてくるのであります。

ところが、自分の誤ちや他人の悪をみて、それをすぐそのまま消えてゆく姿と見得ない時、たまたまあるわけです。その時には、自分を責め裁き、他人を責め裁いた想いなり言葉なり、行為なりを、気持の落ちついたところでよいから、改めて、今のことはすべて消えてゆく姿だったのだなあ、世界人類が平和でありますように、私どもの天命が、あの人々の天命が完うされますようにという祈り言の中に今までのことをすべて入れきって、守護の神霊への感謝をすればよいのであります。

失敗したら、何度びの失敗でもよいから、その度びごとに反省して、消えてゆく姿として世界平和の祈りをつづけければよいのです。こういうように徹底した消えてゆく姿で世界平和の祈りの行いでないと、なかなか自他を浄めるわけにはまい

りません。

人を責め、他国を責める想念をそのままにして置いて、いくら平和、平和と叫んでいても、到底世界平和どころか、自身みづかみの平和な環境さえ生まれてはきません。

私たちは、倦うまずたゆまず、消えてゆく姿で世界平和の祈り、という光明思想の行為を為しつづけてゆかねばなりません。徹頭徹尾消えてゆく姿で世界平和の祈りの日常行をしつづけてゆくことが、そのまま自分を救い人類に平和世界を導き出すことになるのであります。どうぞ皆さん、ますます大らかに明るく世界平和の祈りをつづけてゆこうではありませんか。

五井昌久著『神は沈黙していない』より